

日本言語聴覚士協会九州地区学術集会鹿児島大会と 医療従事者不足 VS 医療従事者の賃上げについて

一般社団法人鹿児島県言語聴覚士会 会長 | 原口 友子

令和6年は、暑い暑い夏がいつまで続くのかとを感じるような気候のまま、11月に入りましたが、それでも季節はめぐり、今年もこの鹿児島市医師会報・新春号の寄稿文を執筆する季節となりました。

鹿児島県言語聴覚士会では令和5年秋から準備を始めた、第13回日本言語聴覚士協会九州地区学術集会鹿児島大会をいよいよ年明け令和7年3月22・23日に開催します。本会報の令和6年新春号においても少しご紹介しましたが、この学術集会の前身は1987年にスタートした九州言語臨床研究会で37年目を迎えます。今回、鹿児島大会のテーマを「守破離～私たち言語聴覚士は何を守り、発展、革新させていくのか～」としました。日本において言語聴覚士という国家資格が誕生し25年が経過しました。国家資格化された当初4,003名の言語聴覚士が誕生し、2024年現在、約4万名まで増加し言語聴覚療法へのニーズに応えられるようになってきています。しかし、一方、2025年、2040年問題と大きな変革を迎えるこの時代に、私たち言語聴覚士も、医療、介護そして社会全体のパラダイムシフトに合わせ革新が求められて

いると考えています。私たちは、先達が築き上げてきた言語聴覚士という専門性やアイデンティティを守り、そして革新を起こし、力強く発展させていくための手がかりをつ

かむことを大会の目的としました。

私たち医療従事者は、目の前の患者さん方により良い医療を提供するために、このような学会での研鑽に取り組んでいる一方、コロナ禍での医療業界の過酷さや昨今の他業種の賃上げなどの影響を受け、医療業界から離れていく方が増加しており、人手不足が日々の臨床に影響を及ぼしつつあります。鹿児島県においても状況は同じであり、現実的な問題として、高齢者の増加や小児の発達障害における支援の需要増加などにより、言語聴覚士の養成校への募集は養成校によっては25倍を超える状態の一方、入学者は定員割れしている状況です。この傾向は、言語聴覚士だけでなく理学療法士そして看護師にまで及んできていると聞いています。このような人手不足への対策として、令和6年診療報酬改定は、昨今の食材料費、光熱費をはじめとする物価高騰の状況、30年ぶりの高水準となる賃上げの状況などといった経済社会情勢は、医療分野におけるサービス提供や人材確保にも大きな影響を与えているという厚労省の判断の下、病院、診療所等の医療従事者の賃上げの目標数値を定め、プラス改定するというこれまでにない踏み込んだものとなりました。しかし、このような対策だけで、医療業界の人手不足を解消することはなかなか難しいと感じます。私たち言語聴覚士は言語聴覚士の仕事の楽しさ・魅力やそれぞれの職場の魅力を発信することにも努めていきたいと考えています。

様々な課題が多い医療のお仕事ではありませんが、読者の皆さまと皆さまに支えられている方々にとって幸多き一年となりますことをお祈り申し上げます。

